昭和12年の松江城天守の調査

ー松江城天守実測図ー

昭和４年（1929）に国宝保存法が成立し、名古屋城大天守（昭和５年指定）を皮切りに当時現存した天守が次々と国宝指定となり、松江城天守も昭和 10 年（1935）５月に国宝指定されました。

この頃、全国的に天守を中心とした城郭建築の調査が相次ぎ、松江城天守も昭和 12 年（1937）に名古屋高等工業学校（現名古屋工業大学）の城戸久助教授らが実測調査を行いました。

天守の外側に足場を組み、屋根の上から床板の下までくまなく調査しており、精確で巧みな描写の実測図は見事な出来栄えといえます。

当時の新聞記事によると、①慶長 16 年銘の祈祷札（「寄進札」「護摩札」）の発見により築城年代を確定できたこと、②柱の墨書から４回にわたり修理した事実が明瞭となったこと、③腐朽が甚だしく全体的な修理が求められること、などを成果として挙げています。

松江城天守実測図

昭和 12 年（1937）
城戸 久 ほか作図

全 92 枚、各 19.0cm×26.5cm
松江歴史館蔵

昭和 12 年７月 25 日頃から８月 15 日頃の約 20 日間かけて、名古屋高等工業学校（現名古屋工業大学）の城戸久助教授と助手２名が松江城天守の現状を細かく実測した。平面図、断面図、立面図（姿図）、見上げ図、床伏図など、昭和の解体修理工事以前の松江城天守の姿を知ることができる希少な資料である。

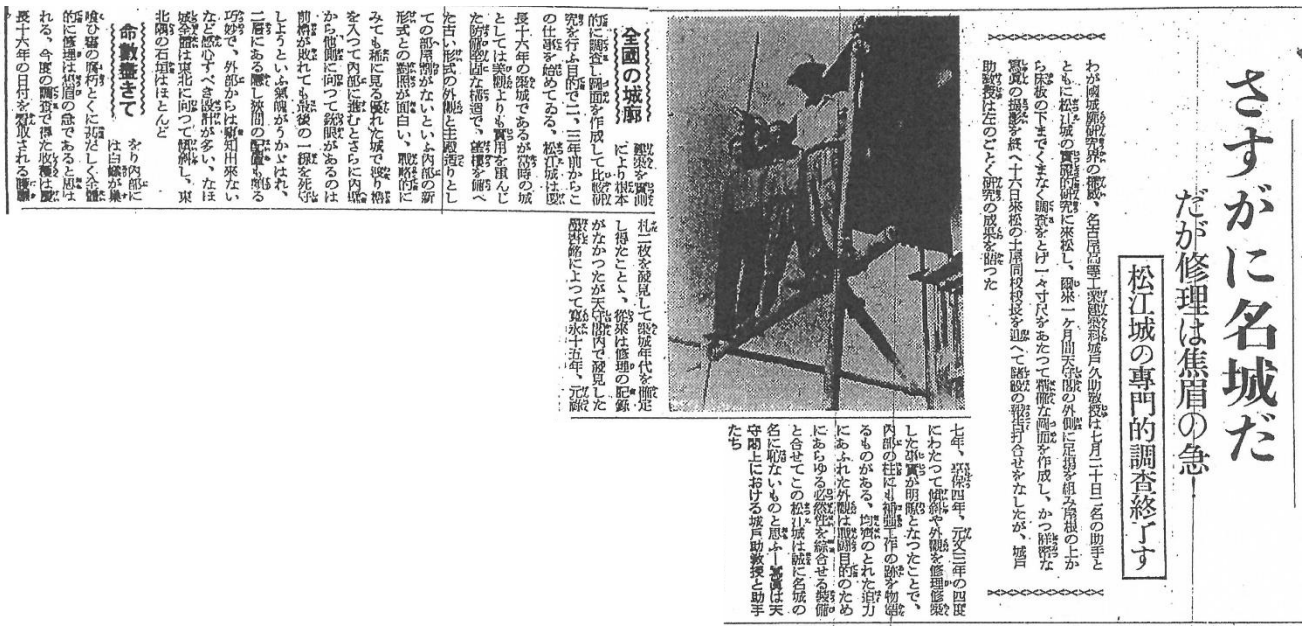
城戸　久（きど　ひさし）

1908 年－1979 年（享年 71 歳）

日本建築史、特に近世城郭建築の専門家として、昭和 10 年代に恩師土屋純一名古屋高等工業学校校長の指導を受け、犬山城天守、大垣城天守、彦根城天守などを皮切りに多くの近世城郭建築の研究に携わる。

昭和 12 年（1937）、研究のため前述の土屋校長とともに松江城天守の調査を行い、詳細な実測図を作成する。同調査で慶長 16 年銘の２枚の祈祷札を発見するが、昭和 25 年から同 30 年（1950-55）に実施された松江城天守解体修理工事の報告書に当該祈祷札の記載がないことから、昭和 41 年（1966）発行の『仏教藝術 60』に掲載した論考「松江城天守」で、祈祷札確認の事実を述べる。

1929 年名古屋高等工業学校（現名古屋工業大学）建築学科卒。1934 年名古屋高等工業学校助教授、1942 年同教授。1945 年から名古屋工業大学教授。1972 年定年退官後、名城大学教授を務めた。工学博士。1973 年紫綬褒章受章。



さすがに名城だ

だが修理は焦眉の急

松江城の専門的調査終了す

『朝日新聞島根版』（昭和１２年８月１８日）部分

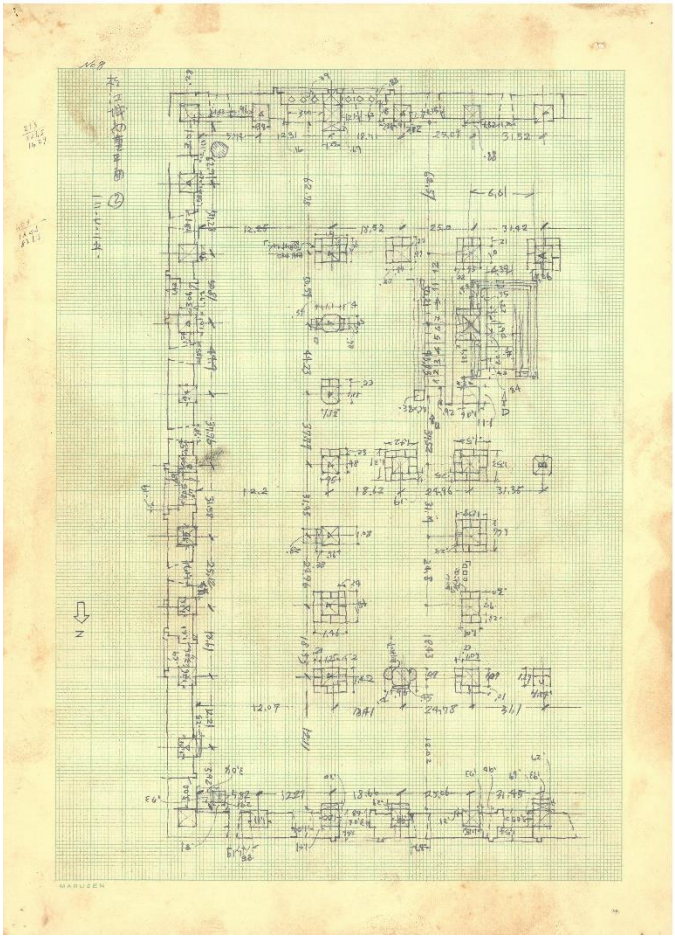
参考文献

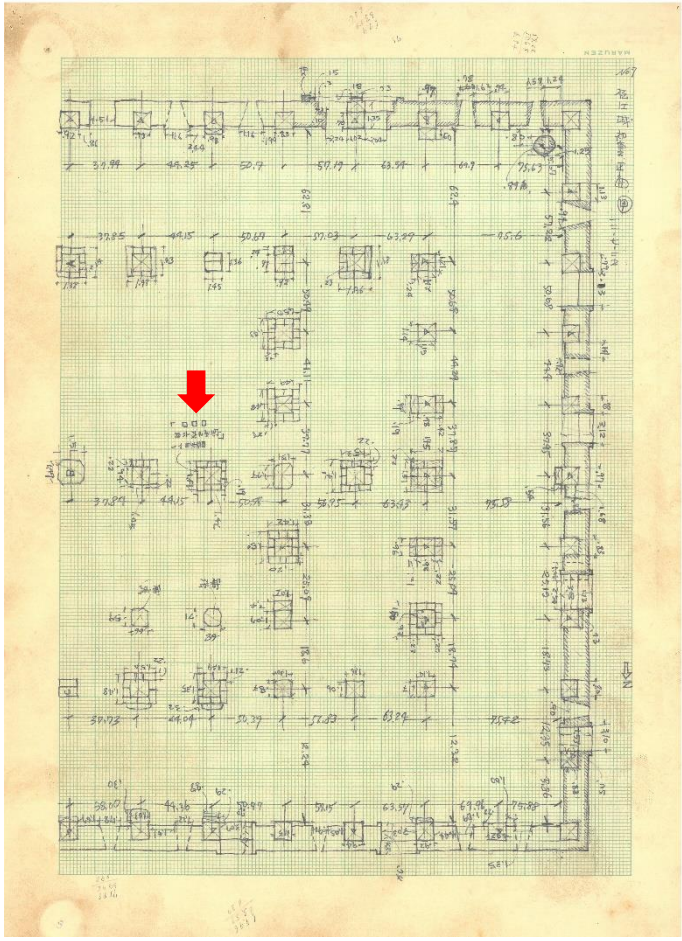
亀井伸雄 2018「昭和 12 年の「松江城天守実測図」について」『松江城天守実測図（城戸久氏調査図面）』松江城関係資料集１　松江市

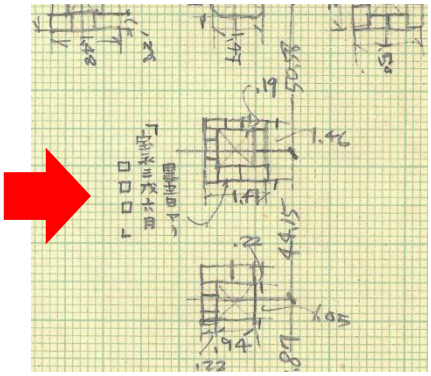
新庄正典 2016「昭和 12 年に行われた松江城調査とその報道―城戸久氏の実測図面と新聞報道を通して―」『松江歴史館研究紀要』第５号　松江歴史館

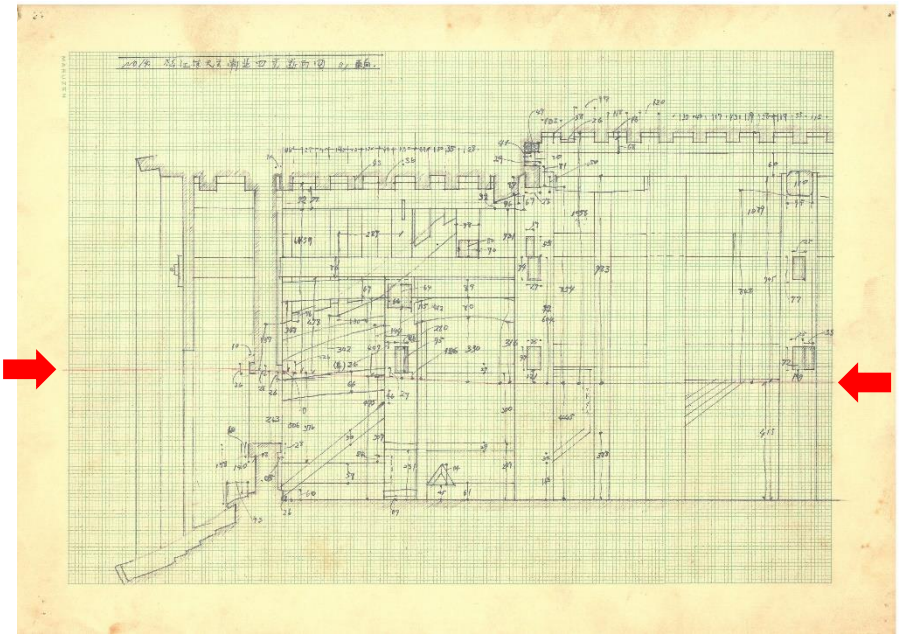
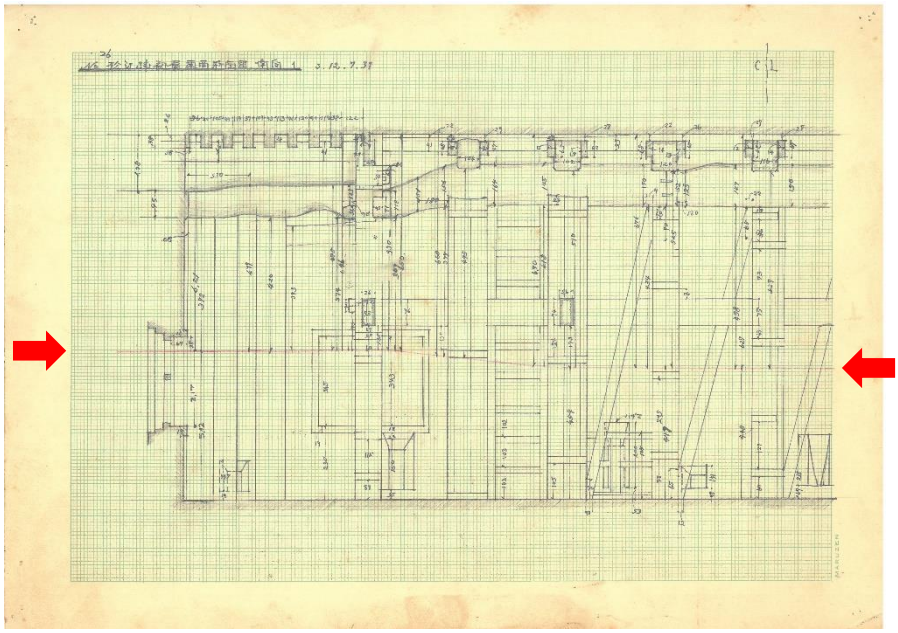
「No.７　松江城初重平面（甲）」
「No.８　松江城初重平面（乙）」

松江城天守１階の平面図で、No.７（甲）は西側半分、No.８（乙）は東側半分の図面である。両図とも「一二・七・二五」の文字から昭和 12 年７月 25 日の実測だとわかる。「△」印は１階から２階までの通し柱を示す。No.７（甲）の中央付近に書かれた柱の包板（つつみいた）には、「墨書アリ「宝永三戌六月／□□□」」と注記する。







「No.14　松江城天守南北四重断面図（１）東向」
「No.26　松江城初層東西断面図 南向１」

松江城天守の１階（No.26）と４階（No.14）の断面図である。両図とも本来直線であるべきはずの水平基準線（朱線）が途中で右下がりに曲げて調整した線引きとなっている。それだけ天守各階が傾いていたことを示している。